

# 伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通

——翻刻と解題——

青山英正\*

## 《解題》

### 一 書簡の概要および意義

本稿は、架蔵の伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通の翻刻およびその解題である。颯々（天明二年〈一七八二〉十月〜安政五年〈一八五八〉二月十六日）は、近江大津に住む鹿都部真顔門の狂歌作者である。千楯（安永七年〈一七七八〉〜弘化二年〈一八四五〉九月二十一日）は、寛政九年に二十歳で本居宣長に入門して以来、京都の錦小路室町西入ルで家業の書肆恵比須屋市右衛門を經營するかたわら、京都鈴屋門の拠点である鐸舎を主宰したことで知られる人物である。

書簡は、筆者が一括して入手した際、二八・五厘×二〇・六厘×四・二厘のかぶせ蓋を持つ漆塗りの文箱に収められていた。箱の内容は計三十九点であったが、そのうちの一点は、千楯の詠草の裏に「かぢや源兵

衛様」という宛名を書き、書簡を包む形に折りたたんであり、おそらく詠草の反古を包紙として用いたものと思われる。よって書簡は計三十八通、包紙一枚ということになる。これらは一切表装されておらず、書簡によっては少しばかりの破れがあったものの虫損は皆無であった。概して保存状態は非常に良く、丁重に扱われてきたことがうかがえる。そして、筆跡は紛れもなく城戸千楯のものである。

いずれの書簡にも年次が記されていないが、書かれている内容などからして天保期のものであることは間違いない。判明した限りでは、上限は天保三年、下限は同十四年である。書簡には、千楯自身の隠居や妻の病氣といった私的な近況のみならず、鐸舎社中の雅事に関する内容、たとえば毎月十七日におこなわれていた月次会や、下鴨・上賀茂を始めとする諸社奉納歌への出詠の依頼、そうした情報の近江各地への伝達の依頼、大橋長広への鐸舎の名義譲渡（書簡二十二）などが記されており、ここから天保期における京・近江の鈴屋門流の活動や交流の様子を具体的に知ることができる。

とりわけ注目されるのは、千楯と上方真顔門人との交流である。そもそも千楯と颯々とが知り合ったのは、後述するように城戸家の本家に当たる島田八郎左衛門すなわち京の真顔門人菊廻舎真恵美を介してであったと思われるし、書簡中にはその真恵美（書簡一、二十六、二十九、三十四）のほか、林鮎主（書簡二）や蘆辺田鶴丸（橘庵）（書簡一、五）、桂有彰（玉兔園）（書簡七、十二）や長谷川数照（白菊亭）（書簡七）といった名も見える。このうちの真恵美、有彰、数照、そして颯々は、鐸舎社中によって天保六年頃からおこなわれた諸社奉納歌に出詠した面々にほかならず、さらに書簡七によれば、有彰と数照は『諸社奉納歌集』下鴨社之部（天保七年跋刊）刊行の中心的な役割さえ果たしていた。

従来、宣長没後の鈴門についての研究は、「四大入」の一人である平田篤胤を中心に据えて進められてきた感がある。それに引き替え、篤胤の上京を妨害したことで知られる千楯と鐸舎に関する評価は、たとえば藤井（山崎）芙紗子が、「文政期後半以降の鐸舎は、鈴屋派全体の、京都における学問所という公的性格を失い、或は村田春門の、或は城戸千楯の、個人的な私塾と化してしまっただと考えられる。そして、鐸舎の文学活動は、幅を一層せばめられて、歌会中心の平凡なものになってしまったのである」と述べたように、村岡典嗣によって歌文派という烙印を押されて以来、決して芳しくない。

しかし、千楯が本居大平に、篤胤排斥の理由として、「文雅の無之人故何も聞べき事なく」（文政六年九月十日書簡）と書き送ったのは、宣長の学問が歌文（文雅）と古道との両方によって成り立っているという前提に立ち、その一方の柱である文雅を捨てて省みないように見える篤胤を非難したのであって、決して自らが古道を捨て去ろうとしたのではない。千楯には、『万那備能広道』（文化十四年刊）ほか、千楯なりに宣長古道学を継承しようとした著作があり、そこには篤胤に類似する点さえ見出せるのである（青山「化政期の歌文派和学者における教化意識の高まり——宣長学の継承と変容」日本近世文学会第一一五回大会口頭発表、二〇〇八年九月）。よって、千楯や藤井高尚のようなこれまで歌文派と称されてきた和学者も、改めてその文芸活動と古道学との両面に目配りした上で評価し直すべきだと思われる。たとえば、『諸社奉納歌集』下鴨社之部（天保七年跋刊）・上賀茂社之部（同八年跋刊）・松尾社之部（同九年跋刊）・梅宮社之部（同年跋刊）といった歌集と、古道の基本としての敬神を説いた『民家敬神録』（天保十一年刊）といった古道論的著作とは、ほぼ同時期に鐸舎の蔵版として出版されている以上、表裏一

体の営みとして考えるべきであろう。

また、学問の享受層が急速に拡大した化政期以降の国学史を理解するためには、思想的著作をものした一握りの人物に焦点を当てるだけでは不十分であるように思われる。ある思想がいかなる人間関係の中で育まれたのか、その思想をいかなる人々が支持したのかといったことも、思想家を取り巻く人間関係のみならず、資金協力や出版活動などを含めて具体的に明らかにしなければ、その思想が当時の社会においていかなる意味を持っていたのかが見えてこないだろう。

こうした意味で、歌文と古道との両面にわたる著作をものし、かつ恵比須屋市右衛門という書肆経営者としてまた鐸舎という学問所の主宰者として、若狭小浜の義門や備中の藤井高尚といった地方在住の学者や上方の狂歌壇の人々との人脈を築いた城戸千楯は、決して容易に看過できる人物ではない。むしろ、宣長後の国学史は、篤胤を相対化する意味でも、これまで歌文派とされ軽視されてきた千楯のような人物も視野に入れた形でこそ、再考すべきだと思われるのである。本稿で紹介する書簡は、そのための一つの足がかりとなるはずである。

## 二 城戸千楯・伊東颯々・菊廻舎真恵美の交流

ここであらかじめ、千楯と颯々との関係について、そして兩人を引き合わせたと考えられる菊廻舎真恵美について、やや詳細に述べておこう。伊東颯々は、先述の通り鹿都部真顔門人である。本名、臣規<sup>(2)</sup>。通称、源兵衛。号、秋廻屋（舎）・颯々・松風颯々。近江国大津の船頭町に住み、家業は鍛冶職人であった。牧野悟資によれば、四方側の月並集における颯々の名の初出は、文政七年頃の成立と推測される『俳諧歌双見百

首』であり、四方側の春興帖『四方廻波流』文政十一年版に、狂歌判者として名を連ねているといふ<sup>(3)</sup>。彼に関する資料としては、滋賀県教育会編『近江人物志』（文泉堂、一九一七年）や吉田克継『鳩のうみ』（吉田虎之助、一九二八年）などのほか、管宗次が颯々の二十五年祭の追悼集『まつかぜ集』（明治十六年序刊）から颯々の遺詠・遺稿七十三首を紹介し<sup>(4)</sup>、中澤伸弘が、近江の歌人である西村鈴雄の颯々宛書簡、および颯々が自らの七十の賀に縁ある歌人たちに「和歌狂歌連誹発句」の短冊を求めた際の刷り物を紹介している。また、大妻女子大学図書館には颯々宛書簡が三通所蔵され、そのうちの愉快斎石鋼・年麗舎春則によるものを、やはり牧野が紹介している<sup>(6)</sup>。

さて、千楯と颯々との交流は、本稿で紹介する書簡一により、天保三年からさほど遡らない時期と推定される。千楯と上方の真顔門人との交流そのものは古く、高松亮太によれば千楯と林鮎主との関係が遅くとも寛政九年には始まり、鮎主の弟である秋告（安五郎）と千楯（恵比須屋市右衛門）とが奥付に名を連ねる和学書が十点ばかり見出せる。狂歌本においても、文化六年に城戸市右衛門・林安五郎・錢屋長兵衛が奥付に名を連ねた仙掌亭不崑藏版『狂歌筒井管』（カリフォルニア大学バークレー校蔵）が刊行されている。そして、千楯と颯々を引き合わせたと考えられる菊廼舎真恵美は、鮎主と同様京在住の有力な真顔門人であった。

真恵美は、『平安人物志』文政十三年版文雅の部に、「嶋真衛美<sup>号菊廼舎</sup> 兩替町三條北 嶋田八郎右衛門」とあり、また天保三年版文雅の部に、「嶋真美<sup>号菊廼舎</sup> 兩替町三條北 嶋田八郎左衛門」とある人物である。牧野の指摘によれば、文政二年の四方側月並集『俳諧歌貴賤百首』が初出で、それ以前は延年と称していたらしい。文政六年成立とおぼしい『俳諧歌鮮衣集』

では判者となり、同十一年版『四方廻波留』では四方側の有力判者とともに「四方同盟判者」に名を連ねている<sup>(8)</sup>。この真恵美と颯々との間に文政年間以来の親交があったことは、これもすでに牧野が指摘したように、四方側の地方判者たちによる真顔追善集『俳諧歌玉比古集』の題「秋夕」で両者が合評をしていること、真顔の『斧の響』天理図書館本が、真恵美による転写をさらに颯々が転写したものであることなどから明らかである<sup>(9)</sup>。

そして、真恵美は、三井組や小野組と並んで島田組と称される、京の両替商・呉服商恵比須屋を営んでいた八代目島田八郎左衛門その人であった。まず、真恵美の屋号が恵比須屋であったことは、『村田春門日記』文政十年二月八日条に、春門が千楯と、「夕方夷屋真恵美方へ被招<sup>(10)</sup>」て同道したという記述から確かめられる。また、衣棚姉小路上ルに店があった八郎左衛門の居宅が、『平安人物志』に記される両替町三條北にあったことは、文政五年九月の両替町宗門人別改帳（三井文庫蔵、続六四三三―一）によって裏付けられ、千楯の門人である日扇（長松清風）も、安政四年一月に「千切屋八品堂浅七の宅」で本門仏立講を開講し、「町内とし寄中村半兵衛」の「宿坊興福寺と法論ニ及び大ニ折伏をして、終ニ又此町内旧宅をおひ出され」た際に、「三條両替町の角、嶋田八郎左衛門の隠居処ニ住するやうにな」ったと記している<sup>(12)</sup>。恵比須屋の研究をした宮本又次も、同様に次のように報告をしている。

島田武彦家（島田要家）に「島田雅喬日記」なる相当大部のものが保存されている。嘉永六年より明治七年に至るものであるが、その多くは冠婚葬祭に関することが多く、また来訪者の姓名を記した事項が多い。それによると<sup>(13)</sup>両替町に八郎左衛門家があり、新町に隠居所があったようである。（傍線、青山）

なお、宮本は島田氏の系譜についても調査しており、それによれば、この八代目の八郎左衛門は「周忠」という名を持っていた。<sup>(14)</sup>すなわち、『諸社奉納歌集』下鴨社之部（天保七年跋刊）などに「嶋田八郎左衛門源周忠」などとあるのは、真恵美その人であったことになる。

そして、天保十三年九月二十八日および十月二日付で竹川彦三郎等宛に提出された（島田八郎左衛門御用名前護替ニ付通達書）（島田八郎左衛門御用方譲渡一件通知書）（三井文庫蔵、続二四二七―一四一七・八）によれば、この時に周忠は宗二と名を改め、正房と改名した弟与三郎に八郎左衛門を譲った。京都黒谷の浄土宗金戒光明寺にある島田家の塋域に、「菊翁宗二居士」と刻まれた一基があるが、『平安人物志短冊集影』（思文閣、一九七三年）が記すように、菊廼舎の「菊」を用いたこれが真恵美の法諱であり、碑文によれば、彼が没したのは嘉永三年七月二十六日であった。

千楯と真恵美との交流がうかがえる資料は、管見の限りでは先述の『村田春門日記』文政十年二月八日条が最初で、続いて同十二年十一月に、真恵美編『狂歌百鬼夜興』に千楯が序文を寄せているのが見受けられる。同十三年に真恵美が本居大平に入門（本居大平『秋草』東京大学国文学研究室本居文庫蔵、国文研マイクロフィルムによる）したのは、おそらく千楯の紹介によるのだろう。その後天保年間には、四年十二月の大平の追慕会（『天保四年十二月十三日秋哀傷亡父追慕会』東大本居文庫蔵、国文研マイクロによる）や六年九月の大平の三回忌（『三回忌の歌』（同右））にもに出詠し、鐸舎社中による『諸社奉納歌集』への真恵美の出詠へと続く。

ただ、文政十年以前に交流がなかったかと言えば、決してそうは思われない。かつて藤井（山崎）美紗子は、「千楯が、高尚や長谷川菅緒と

鐸屋を興し、これを後援し維持していくだけの財力を有したのも、ただ書肆蛭子屋の主人というだけではなく、実は島田組一統に属していたからであったと知られるのである」<sup>(15)</sup>と、千楯と島田組との関係を示唆したが、千楯を含む城戸家の人々の法諱が、金戒光明寺の塔頭である西住院過去帳『多びす屋嶋田一統霊名簿』に記されている事実（西住院主戸川隆博氏のご教示による）は、千楯が島田一統に属する人物であったことを決定的に裏付ける。

同過去帳によれば、城戸家は千楯の先代の市右衛門（寛政十二年八月二十六日没）に始まる。そして、天神山町文書の『天神山町変遷図』・『天神山町中画図』・（天神山地籍図）（文化五年五月）などによれば、寛政二年九月、すなわち千楯が十三歳の時に錦小路通室町西入北側中程の表間口三間五尺九寸、裏行十六間一尺九寸の家に入居している。<sup>(16)</sup>この城戸家独立に、島田八郎左衛門家の資金的援助が皆無であったとは考えにくく、また、千楯の文事に關しても、その背後に島田家の財力存在をうかがわせる事例がある。管宗次が紹介するところによると、天保十二年三月に千楯を筆頭とする鐸舎執事十五名の連名で、鐸舎社中の人々に『鐸舎類題集』への投稿を呼び掛ける書状刷り物が配付されたことがあったが、その刷り物には、当時流行していた類題集の通例と異なり、「板に彫たる價もすべてのつひえもいさゝかも乞ひ侍らねば」と、入花料を一切取らずに板木代をまかなうことが宣言されていた。<sup>(17)</sup>集歌の時期が、先述した天保十三年の八代目島田八郎左衛門周忠の隠退にちょうど符合すること、投稿を呼びかけた執事の中に、八代目と並んで、それ以前の鐸舎社中にはその名を見出せない九代目正房が名を連ねていることを考え合わせると、あくまでも推測ながら九代目襲名に合わせた企画として島田家が出資し、千楯にその取りまとめを依頼したものであったか

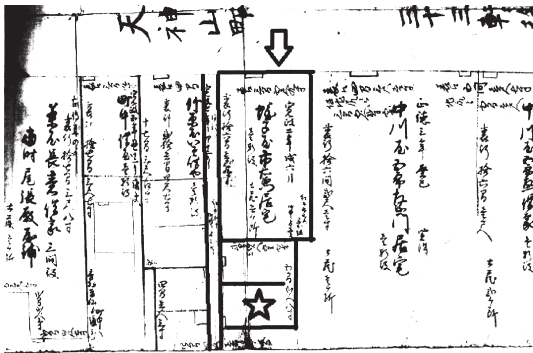


とも考えられる。少なくとも、採算を度外視したこうした類題集を出版するほどの資金を鐸舎に供与できたのは、千楯との縁から言っても財力から言っても島田家以外にあるまい。千楯にとって、書簡一に記されていたように真恵美は「主人」にほかならず、自身の出処進退についてもその目を気にせずにはいられない存在だったのである。

本書簡三十八通の中には、この真恵美のほか、鮎主、田鶴丸、玉兔園、長谷川数照といった真顔門人や、大津松本の正徳寺の僧良昭、大津の商人で歌も詠んだ矢西図中、西村弥兵衛、山中義信、上京していた鳥取の千楯門人畑中重稔・重生父子、それに義門の名も見える。鐸舎には、「学びや」(『諸社奉納歌集』下鴨社之部、長谷川清秋跋)という側面と、「へだてなき友がき」(『諸社奉納歌集』上賀茂社之部、島田周忠(真恵美)序)という側面とがあったようだが、颯々宛の一連の書簡からは、『諸社奉納歌集』や『鐸舎類題集』の集歌や出版といった鐸舎の活動だけでなく、千楯と鐸舎を軸とする縦横の人脈の広がりも知ることができ、天保期の京都における文雅の交流について考える上でも、この書簡を紹介する意義は小さくないと思われる。

### 注

- (1) 藤井(山崎)美紗子「藤井高尚と鐸屋——後期国学の一断面」、『国語国文』第四六卷十二号、一九七七年十二月。
- (2) 滋賀県教育会編『近江人物志』(文泉堂、一九一七年)や吉田克継『鳩のうみ』(吉田虎之助、一九二八年)では「巨規」としているが、東京大学本居文庫蔵『天保四年十二月十三日秋哀傷亡父追慕会』や、鐸舎社中蔵版『諸社奉納歌集』のうちの現存する四冊、下鴨社之部(天保七年跋刊)・上賀茂社之部(同八年跋刊)・松尾社之部(同九年跋刊)・梅宮社之部(同年跋刊)といった、颯々生前に筆写ないし刊行された諸本、さらには本稿で紹介する千楯書簡いずれも「巨規」としている。
- (3) 牧野悟資「斧の響」考——石川雅持と鹿都部真顔の対立」、『日本文学』二〇〇七



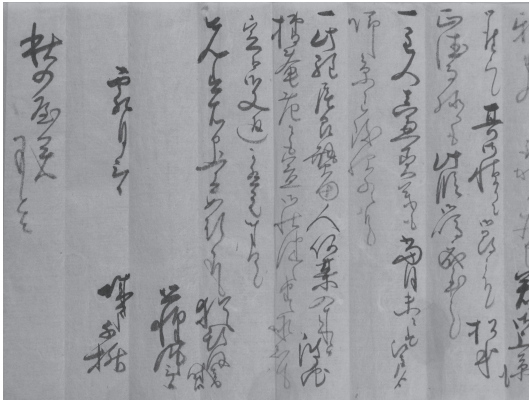
〔天神山地籍図〕

- (4) 管宗次「和歌誹諧体の宗匠 伊東颯々」(『京大坂の文人 続』和泉書院、二〇〇〇年)。
- (5) 中澤伸弘「近世後期近江歌人伊東巨規」(『東洋文化』通卷三三二号、二〇〇六年九月)。
- (6) 牧野悟資「雑体詠格略鈔」考——和歌雑体と天保調」(『国語と国文学』二〇一一年五月)。
- (7) 高松亮太「林鮎主の和学活動と交流」(『国語国文』二〇一一年十一月)。
- (8) 牧野、前掲注3論文。
- (9) 同右。
- (10) 『村田春門日記』(『渡辺刀水集』三、青雲堂書店、一九八七年、二三八頁)。
- (11) 『商人買物独案内』(嘉永三年刊、『都商職街風聞』(文久四年刊)等)。
- (12) 『清風一代記略図』(明治十年頃成立、『日扇聖人全集』第五卷(日扇聖人全集刊行会、一九六〇年)一九八頁。ただし句読点および濁点は私に付した)。
- (13) 宮本又次『史的研究 金融機構と商業経営』(清文堂出版、一九六七年)一八八頁。
- (14) 宮本、同右書、一四九頁。
- (15) 藤井(山崎)美紗子「藤井高尚の伝記資料『備忘録』」、『混沌』第五号、一九七八年九月。
- (16) 天神山町文書(京都市歴史資料館マイクロフィルムによる)。これらの史料にはいずれも、恵比須屋の表間口が三間五尺九寸・裏行十六間一尺九寸で、一軒役・土蔵一ヶ所(寛政二年戊戌六月 紅屋市右衛門家出跡 町中より売)と記されている。本稿書簡中で千楯自身が述べているところによると、居宅の北、すなわち居宅東側に設けられた路地の行き当たりが千楯の隠宅であった。文政十一年九月に村田春門から経営を返されて以降の鐸舎も、ここか、またはその隠宅と居宅との間にあった

と考えられる。高橋広道（笠亭仙果）は、「へだてぬ中の日記」において、「このぬでの屋、ちかき頃まではむかへの家なりしを、このごろ東隣のろじの内へうつして、やがてちたてが家のうしろ也」（『森銃三著作集』第十卷〈中央公論社、一九七一年〉三六四頁より重引）と述べている。なお、西隣は服部敏夏（中川屋五郎左衛門）居宅。前頁に、（天神山地籍図）の一部を掲げた。図中の矢印が千楯（蛭子屋市右衛門）居宅、星印が千楯の隠宅の位置である。

- （17） 管宗次「京の鐸舎の書状刷り物」（『京大坂の文人 続』和泉書院、二〇〇〇年、二六～二九頁）。『鐸舎類題集』の現存については未詳。

＊本稿は、二〇一一年度科学研究費補助金・若手研究（B）「幕末国学者の出版と文学活動——城戸千楯（京都書林恵比須屋市右衛門）の研究」による研究成果の一部である。



書簡一末尾

## 《翻刻》

### 凡例

- 一、底本は、架蔵の伊東颯々宛城戸千楯書簡三十八通と包紙一枚である。
- 一、書簡に年次は記されておらず、年次の推定は青山による。ただし、閏月や干支の表記により確実にその年次と推定できるものと、書簡の内容から推定したものとがある。後者は「○○年カ」とした。
- 一、配列は、推定年月日順とした。ただし、年次を特定できないものは最後に一括して日付順に配列した。
- 一、年次未詳書簡のうち、文脈からある程度時期を絞り込めるものについては、「年次未詳。○○以前カ」等と、推定時期を併記した。
- 一、便宜上、私に句読点・濁点を補った。
- 一、漢字は、原則として通行の字体に改めた。
- 一、改行は原文に従い、字下げなどでもできるかぎり原文の体裁を生かした。
- 一、踊り字は原文に従った。
- 一、合字は仮名に開いた。
- 一、助詞として使われている而（て）・者（は）・江（へ）などは、漢字の小文字で表した。
- 一、「〔 〕」内は、すべて青山による注記である。
- 一、誤字や誤記は原文のままとし、その右脇に「ママ」と注記した。
- 一、人名や難読の当て字などには、適宜その右脇の「〔 〕」内に注記した。

- 一、欠損は□で示し、文脈から文字を推定できる場合は、その右脇の「〔 〕」内に注記した。
- 一、適宜、各書簡の後に人名・地名に関する注、年次推定の根拠などを記した。

### 目次

一（天保三年）十一月三日	十七（天保十二年カ）六月十四日
二（天保四年）四月十九日	十八（天保十二年カ）七月十一日
三（天保四年カ）五月二十二日	十九（天保十二年カ）十二月十六日
四（天保四年十または十一月カ）十八日	二十（天保十三年）三月二十九日
五（天保五年カ）九月二十七日	二十一 日付無し〔天保十三年十月〕
六（天保七年カ）三月五日	二十二（天保十四年カ）九月二十七日
七（天保七年カ）三月十六日	二十三（天保十四年）閏九月二十五日
八（天保七年カ）六月廿中	二十四（年次未詳）一月七日
九（天保七年カ）八月八日	二十五（年次未詳。天保八または十三年カ）一月九日
十（天保七年）十二月二十二日	二十六（年次未詳。天保九年以前カ）一月十四日
十一（天保九年）四月八日	二十七（年次未詳）一月十四日
十二（天保九年カ）五月二十一日	二十八（年次未詳）一月二十四日
十三（天保九年）十二月十二日	
十四（天保十年）十二月七日	
十五（天保十一年）十二月二十五日	
十六（天保十二年カ）五月十八日	

二十九〔年次未詳〕	一月二十五日	三十五〔年次未詳〕	九月二十五日
三十〔年次未詳。天保八年以降〕		三十六〔年次未詳〕	九月二十六日
二月十三日		三十七〔年次未詳。天保十、十二 年頃カ〕	十月十七日
三十一〔年次未詳〕	三月十八日	三十八〔年次未詳〕	十月十八日
三十二〔年次未詳。天保四年カ〕		三十九【包紙】〔年次未詳〕	二月十八日
三月十八日			
三十三〔年次未詳〕	四月二十四日		
三十四〔年次未詳〕	九月十四日		

一〔天保三年〕十一月三日

一筆啓上仕候。寒氣之節ニ御座候処、  
其御家内様御揃、弥御清栄被成  
御座、奉珍賀候。然者当九月  
鈴屋大人霊祀会兼当  
早速入御覽可申候処、彼是当座  
相揃兼、延引仕候。漸出来仕候ニ付、  
相写し御覽ニ入申候。将又当月  
兼題ハ、寒夜埋火  
閏十一月ハ 水鳥近馴  
極月ハ 海辺歳暮  
右追々御出詠被下候。来已正月  
始会三大人東マ<sup>真淵</sup>影供十七日ニ相勤  
申候。兼題も遠国<sup>宣長</sup>へ申遣し候ニ付、此節より  
兼而相定置申候。雪中若菜ニ

御座候。左様御承知置被下候。松本  
正徳寺様<sup>〔良昭〕\*1</sup>へも御尊被成置被下候。

一、野生義、先達而拝顔節御尊申上

置候歟、店ハ寺町蛸薬師下ル町ニ而、

蛸子屋市右衛門ト申。即悴専ら業体

相勤罷在候。野生義ハ、錦小路室町西江入

北側中程ろうじ<sup>〔路地〕</sup>の奥行当リニ而、城戸与

表札出シ御座候。即隠居<sup>\*2</sup>同様ニ罷在候。

乍去、本家表ハ未野生名前ニ而、隠居

とハ内分之義ニ御座候。<sup>〔菊通舎〕真恵美御出会之節ハ</sup>此段御承知置被下候。

右ニ付平日ハ過半ハ寺町へ罷越居

申候故、錦小路方ハ留守勝ニ而錠おろし置

申候。御文通ハ是迄之通、寺町へ御出し被下候。

毎月二日、七日、十二日、十七日、廿二日、廿七日、此

六ヶ日ハ在宿日と相定メ、学事雅事一向ニ

相かゝり、早天より夜四ツ時迄ハ雅友待受、

雅用のミニ取かゝり居申候。若御上京も

御座候ハミ、其御積リニ御尋被下候。松本

正徳寺様へも此段御尊被成置候。

一、主人真恵美義も、当月末ニ者江戸より

帰京被致様子ニ御座候。

一、此程尾州熱田人何某入来候。彼地

橘庵老<sup>〔蘆辺田鶴丸〕\*3</sup>ニも益御壮健之由ニ承知仕候。

定而御文通可有之奉存候。

先者右申上度如斯御座候。猶期後音時候。



霜月三日

恐惶謹言  
城戸千楯

秋の屋君

御もとニ

【裏】

ころ／＼と

ひ／＼いびきの

音丸く

ころがり

ありく

門のみち道

\*1 正徳寺……大津松本の真宗大谷派寺院。『諸社奉納歌集』松尾社の部（天保九年跋刊）に、「近江大津人 正徳寺 良昭」とある。

\*2 千楯の隠居……『京都書林行事 上組重板類板出入済帳』文久三年三月八日条に、「恵美須屋市右衛門と申者、天保三年二月悴江名跡相譲り、歌道指南いたし、城戸千楯相名乗罷在」とあり、千楯が養子の千屯に家督を譲って隠居したのは、天保三年二月であった。事実、「天保三年壬辰夏四月新刻」の年記を持つ藤井高尚『松屋文後集』奥付の居住地表記も、それ以前の「錦小路通室町西江入」ではなく、「寺町通蛸薬師下ル町」とされている。

\*3 橘庵……狂歌作者。姓、岩田。名、靈寿。通称、次郎兵衛。字、可蘭。号、田鶴麿・橘庵。名古屋の人。尾張醉竹側判者。『平安人物

志』文政十三年版（文雅）に出る。天保六年十月六日、長崎からの帰途、明石沖で遭難死。判者を務めた文政九年十月『俳諧歌五日角觥立』に、颯々や真恵美が出詠しており、彼らとの交流が知られる。なお、颯々の追悼集『まつかぜ集』（明治十六年序刊）に、「橘廣田鶴麿長崎より天艸にわたりて其かへるさ明石の沖に溺死せられけるをいたみて／＼としひの明石に名をまか／＼けしはいたましなから死ひかりなり」という颯々の歌が収められている（管宗次『京大坂の文人 続』和泉書院、二〇〇〇年、四〇頁）。田鶴丸の在所は、文政末から天保二年までは京、天保三、四年は尾張熱田である（牧野悟資氏ご教示による）。

■ 閏月から推定。「野生義、先達而拝顔節御尊申上置候歟」以下、自己紹介していることから、千楯と颯々とが出会ったのはこの書簡から遡ることほど遠くない時期であると推定される。また、真恵美を「主人」と呼んでいる点も注目される（解題参照）。

## 二（天保四年）四月十九日

貴書忝拝見仕候。薄暑之節、弥御清榮奉賀候。然者月次

兼題且御頼申上候。影供之御詠

御認御差登、忝奉存候。即

御詠草返上仕候。御序ニ御清書被下候。

一、正徳（良昭）和尚御小兒御死去之由、

扱々御きのどくと奉存候。御出会

之節宜敷御悔被仰上被下候。外ニ

此節伯母御御不快之由、重々

御心配奉察上候。

一、高嶋僧<sup>\*1</sup>御出会之由、此人<sup>〔義門〕\*2</sup>妙玄寺之

知己之由、定而仰之通てにをは家と

奉察候。妙玄寺ハてにをは坊と異名

付候位之人にて、此道ニは天晴之

人ニ御座候。兼而高嶋辺ニ者、

妙玄大徳之知る御人御座候趣も

承知仕候。追々御出会候ハゞ様子

御きかせ被下候。京地へも御上りも候ハゞ、

拙宅へも少し御立より被成候様、

御噂置被下候。

右御報如斯ニ御座候。尚期後音時候。

恐惶謹言

四月十九日

城戸千楯

秋の屋君

御もとニ

二白 此節摂津国中山寺之

開帳ニ参詣処々相通り、丹州

へ野勢妙見山越にて罷出申候。

山中ニ而時鳥数声聞申候。

出立之日宿元にても嘯之聞申候。

又当十七日、会席ニ而二声

聞申候。社中入興、哥沢山ニ

出来申候得共、皆安物ニ御座候。

野子兼題詠

更衣

風にちる鳥の上毛のかるき身に

かふるもかるき麻のさごろも

鮎主<sup>〔林〕\*3</sup>の三年の追悼に兼題

雨中時鳥

ぬれてなく山ほとゝぎすことならば

雨にまされる袖もとはなん

又当座ニ茄子といふ

ことを

むかしおもふゆかりのいろのなすびすら

夢にもみつはよしときくもの

御笑覧被下候。なすびハ

本哥にてハ無理なら題にて

こまり入候事ニ御座候

\*1高嶋僧……近江国高嶋の真宗大谷派寺院今津法慶寺の観津か。義門

著『なましな』（天保六年成立、同十三年刊）跋にその名が挙げられて

\*2妙玄寺……義門。天明六年七月七日～天保十四年八月十五日。若狭

国小浜の真宗大谷派寺院妙玄寺の住職。恵比須屋市右衛門を板元として、『てにをは友鏡』（鐸舎蔵版・文政六年刊）、『山口栞』（天保七年刊）、『なましな』（同十三年刊）、『活語指南』（同十五年刊）、『指出の磯 磯のすさき』（同十四年刊）、『活語雑話』（初編＝天保

十年刊・千楯序、二編Ⅱ同十一年刊、三編Ⅱ同十三年刊）を刊行しており、千楯とは深い親交があった。

＊3 鮎主……明和元年（天保二年四月二十日。和学者・狂歌作者。姓、明田。通称、惣兵衛。字、波臣。号、宰相花。『平安人物志』文化十年版（歌）・文政五年版（文雅））に出る。千楯との交流が遅くとも寛政九年に始まっていることなど、鮎主と鐸舎関係者たちとの交流については、高松亮太「林鮎主の和学活動と交流」（『国語国文』二〇一一年十一月）を参照。なお、高松氏が紹介した本居宣長記念館蔵『住吉物語』の識語「寛文四年辰正月中旬書之畢／一校合畢／右者嶋田何某所藏古本於鐸舎／文化十三年子八月十三日一校合畢／城戸千楯／大橋長広／林鮎主（後略）」（傍点は青山）に見える「嶋田何某」は、本稿で千楯との関係が具体的に明らかになった八代目島田八郎左衛門すなわち菊廼屋真恵美の可能性がある。

■天保二年に世を去った鮎主の三回忌の記事があり、同四年四月の書簡であることがわかる。鐸舎社中で鮎主追悼の歌を詠んだのである。

### 三〔天保四年カ〕五月二十二日

貴書忝拝見、弥御清栄奉賀候。

五月々次御詠草御差登ニ拝見仕候。

相印置候分御清書被下、御脚へ御こし被下候。

来月の御ついでにてもよろしく御座候。

御噂之

高崎御僧之義、御叮嚀被仰聞承候。

〔良昭〕  
良正大徳へ書状遣し申候と存候処へ、

御紙面ニ付何卒御達被下候。彼

御町所を存不申候。御次手ニ被仰遣候様

御申上置被下候。当方神事ニも相成申候。

ちと／＼御上京被遅候者、

右御報如此御座候期御音時候

恐々謹言

五月廿二日

城戸千楯

伊東源兵衛様

二白 御状御表書不分明ニ而届き

間違可申哉と奉存候。野生隠宅方へ

御差出しニ御座候ハヽ

京錦小路室町西江入北がわろうじ

城戸範次

右之通御認被下候。若又忤方へ御差出しニ

御座候ハヽ

京寺町蛸薬師下ル

城戸市右衛門ニ而

同 範次

又ハ千楯ニ而も

右之通被成下候得者、早速下拙隠宅

方へ相達し申候。十六日十七日之間ニ

候ハヽ隠宅方へ直ニ御届被下候方

会席二間ニ合申候

右□様之内何れニ而もくるしからず候

当時ハ大抵隠宅方ニも罷在候故也

■隠居後ゆえ天保三年以降であり、かつ自己紹介をしていた書簡一よりは後のものと思われる。一方、自身宛の書簡宛先を指定していることからして、文通を始めて間もない時期であろう。また、「高嶋僧」のことを聞かせて欲しいと頼み、また良昭の身内の不幸を伝え聞いた書簡二と一続きと考えられることから、天保四年と推定した。

#### 四〔天保四年十または十一月力〕十八日

忝拝見仕候。一兩日者殊之外

寒気ニ相成申候。弥御清栄奉

賀候。月次兼題御詠、当日

間ニ合、席中披露仕候。

衆議判ニ而ハ、はじめの御哥

多哉ニ御座候故、先日御預り申置候

御短冊、以代筆清書いたさせ申候。

仍而御清書御差登ニ者及不申候。

野生ハ中の御詠勝れて覚え

申候也。

一、先日秋哀傷御詠三枚之内

壹枚相とゞめ残候、二枚御戻し

可申上様、先便申上候得共、哀傷之

御詠故、御地ニ而も余り外へうれ申

まじく、所謂だちんごけニ相成候

もいかゞと、当方へ申受置候間、

左様思召被下候。外ニ白短冊壹枚

御預り申置候。来月々次御詠御差

出し候節、代筆の間ニ合せ可申候。

是又左様思召被下候。

一、秋津主ハ

紀州若山広瀬中之町

本居弥四郎内遠

号ハ大平翁ハ藤垣内也

右之通御座候。早々以上

十八日 千楯

臣規君

御もとニ

■天保四年九月十一日に本居大平が亡くなり、同年十二月十三日に開かれた大平追慕会に、颯々は千楯や真恵美とともに「秋哀傷」という題で歌を出詠している（『天保四年十二月十三日秋哀傷亡父追慕会』写本、東京大学国文学研究室本居文庫蔵、国文研マイクロによる）。颯々はその出詠のため短冊に歌を三首書き送り、千楯に選歌を乞うたのである。なお、颯々の出詠歌は、「千世をふるためしもよそにきく月のそらたのめなるけふに有かな」。



五〔天保五年力〕九月二十七日

御細書被下、忝拝見仕候。追日

秋寒相増候処、弥御清栄奉賀候。小生

無異罷在候。御休意被下候。然者、

御詠草拝見仕候ニ付、御返進申上候。

御入手被下、何卒御清書被下、御序ニ

御差登被下候。当廿九日御詠ハ御料紙ニ

代筆ニ而相手向可申候。左様思召被下候。

如命久々御無音、当方よりも毎々

申出し居候事ニ御座候。御同苗様

御死去、御悔も不申上段、御免被下候。

御町内御故障等、嘸々御繁多奉察候。

小子も七月十一日より痼病ニ而

漸八月末之比床を上ゲ申候。

御地へも月見比ニは可罷出心得も

御座候処、右之仕合残念ニ奉存候。

猶其内ニ御訪ひ可申上候。

一、田鶴鷹翁久々御上京ニ御座候。<sup>(蓋)</sup>

即今廿七日帰国ニ御座候。来春

三月比上京之由ニ御座候。かけ違

京師御滞留御文通も無之由、小生

方へハ三五度も入来ニ而相咄申候。

旅宿ハ存不申、彼家より毎々御入来

御座候。

一、為御菓子料忝封御惠投被下、

毎々御芳志忝落手仕候。奉厚謝候。

一、月次三月より以後之方御認被下

忝入手仕候。将又短冊愚詠

相認候様、承知仕候。即此度

相認候而、さし上候。御入手被下候。

最早明後日会ニ而甚来客多く

細答ニ不能候段、御高免被下候。

ちと／＼紅葉之比ハ御氣延ニも

御上京被成候。通天嵐山等

思召次第御供可仕候。右御報

早々如斯御座候。恐惶謹言

九月廿七日夜認 千楯

臣規君

\*九月二十九日……本居宣長の祥月命日。

■田鶴丸の在所は、書簡一注3で触れたように、文政末から天保二年までは京、天保三、四年は尾張熱田である。また、田鶴丸は同六年十月六日、長崎からの帰途に明石沖で遭難死しており、そこに至るまでの時間的経過を考えれば、本書簡は天保五年九月と推定できる。

六〔天保七年力〕三月五日

以手紙申上候。追日春暖相催候処、

弥御清榮奉賀候。然者

諸社奉納之内、日吉社出題

仕候。又々乍御苦勞御出詠被下候。

即別紙之題書差上申候。御入手被下候。

誠ニ先日者、梅宮奉納短冊

御登、又勢田之義ニ付、御心配

被下、御厚志忝奉存候。其二付

貴翁御詠拝見、奉感心候。

御報可申上処、彼は延引仕候。

当年ハ嵐山の花も盛り之節ハ、

雨ニ而散々之事ニ御座候。東山辺も

同様ニ御座候。乍去此節おくれ

ながら追々咲申候。嵐山ハ少々

早く候得共、廿九日参り申候而安心仕候。

春雨にあはれ過ぎぬ心とハ

ひとへにしれよ山桜ばな

御笑覧被下候。○八幡行も

段々延引、四月十日過ニ相成申候。

何とぞそれ迄ニ御地へも一度ハ

遊行仕度奉存候。京地も開帳

彼は賑々敷ちとく御登被成候。

右申上度、如此御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

三月五日

伊東源兵衛様

\*梅宮奉納……天保七年三月四日奉納、同年春畑中重稔序、同九年二月一日早川真学跋『諸社奉納歌集』梅宮社之部。

■『諸社奉納歌集』下鴨社之部の、天保七年四月一日付長谷川清秋（数照）跋に、「去年の春よりかも下上のミヤしろをはじめとして、平野・松尾・稻荷・梅宮・日吉の大御神たちの大まへに手向をへ給ひぬ」とあり、天保六年春以降同七年四月一日までに梅宮社と日吉社への奉納は終えていた。また、注の通り、梅宮社への奉納は同七年三月四日であった。それにあわせて颯々が歌を書き送ったと考えられることから、同年の書簡と推定した。なお、同年のものと推定される三月十六日付鷺見安歎宛千楯書簡（東洋大学稲葉文庫蔵、国文研マイクロによる）によれば、大坂に滞在していた藤井高尙が三月五日に上京し、十三日に下坂するまでの間に、東山へ「うつろひ方なる花を見ニ同道」している。

## 七〔天保七年力〕三月十六日

以寸猪呈上仕候。追日春暖之節

弥御清榮被成御座、奉賀候。野翁無異

罷在候。御休意被下候。然者諸社奉納、

<sup>\*1</sup>長谷川数照主、<sup>\*2</sup>桂澄鷹主玉兔園之事

御世話ニ而、<sup>\*3</sup>先下鴨社之分より急々

彫立之御積り相成、此節板下ニ

相かゝり申候。右ニ付相しらべ見候処、

貴翁御詠相見え不申、定而其節

御出詠無之候事と奉存候。此外ニモ

平野社分も相見え不申、其外ハ是迄

奉納分相見え候得共、右両社ハ御出詠

無之義と存申候。追々彫斉之御積リニ

御座候ニ付、ねがはくは追奉納ニ御詠出

被下候ハミ、重畳之義と奉存候。先ハ

下鴨火急ニ彫立ニ御座候ニ付、此段

御噂申上候。乍去御進メ申上候義ニモ

無之、強而申上候事ニハ無御座候。外ニハ

うちやりニ致置申候事ニ御座候。速ニ

御出詠之事故、此段御噂申上候事ニ御座候。

御出詠候ハミ、急々御頼申上候。先者

右申上度如此御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

三月十六日

城戸千楯

追啓 此節花も追々落花仕候。

兎角天氣おもしろからぬ当年之花ニ

御座候。定而処々御遊行と奉存候。

此節閑暇を見合、湖辺之遊覧も仕度

存居候事ニ御座候。其砌ニ者、拝顔と相たのしみ申候。

下拙忝人ニ候ハミ、何とぞ一夜ハ御無心申上度奉存候。

\*1長谷川数照……狂歌作者。名、清秋。通称、和泉屋仙助・徳兵衛。

号、白菊亭・佳友楼。京都の人。天保二年刊の『狂歌蘭亭帖』(一名

曲水集)の編者で、同書の選者には、臥竜園榊麻呂・万榮亭亀麻呂・玉兔園澄麿(桂有彰)・蘆辺田鶴丸が名を連ねる。『平安人物志』文政十三版(文雅)・天保九年版(同上)に出る。菊廼舎真恵美編・城戸千楯序『狂歌百鬼夜興』や『諸社奉納歌集』諸集に出詠。『諸社奉納歌集』下鴨社之部では跋文も執筆する。

\*2桂澄麿……文雅家(画・狂歌)。天明七年(万延元年)三月十八日。

姓、藤原。名、有彰。通称、藤右衛門(藤左衛門とも)。号、玉兔

園・澄丸・寸美丸・青洋・含水園・含翠園。京都の人。『平安人物

志』文政十三版(文人画および文雅)・天保九年版(同上)・嘉永五

年版(同上)に出る。前述の『狂歌百鬼夜興』や『諸社奉納歌集』

諸集にも出詠。『諸社奉納歌集』上賀茂社之部では跋文も執筆。管

宗次「和歌・狂歌・画の才人 桂有彰」(『京大坂の文人』和泉書院、

一九九一年、七四〇頁)に経歴が詳しい。

\*3下鴨社之分……『諸社奉納歌集』下鴨社之部。天保六年二月千楯序、

同年閏七月二十三日奉納、同七年四月一日長谷川清秋跋。

■下鴨社への奉納は、注3に記した通り天保六年閏七月に終えている。

しかし、本書簡によれば、颯々はその際に出詠しなかったようで、

千楯は颯々に追奉納という形で出詠を促している。本書簡を天保

七年のものと推定した根拠は、以下の二点である。まず、『諸社奉

納歌集』下鴨社之部の跋が天保七年四月一日に書かれており、その

時期に出版の準備が始められ、出詠歌の確認がおこなわれたと考え

られる点である。次に、同書跋において、天保六年から七年春にか

けて下鴨・上賀茂・平野・松尾・稲荷・梅宮・日吉社への奉納を済

ませたとする記述が、三月五日付書簡六において颯々が梅宮社への

奉納歌を提出していることや、本書簡中において、颯々の歌が下

鴨・平野以外は「是迄奉納分相見え候」と千楯が述べていることと  
時期的に符合する点である。仮に、本書簡が天保八年以降であると  
するならば、下鴨・平野社奉納歌の確認が一年以上も延引すること  
の説明が付けられなければならないまい。そして、本書簡を天保七年と  
考えると、書簡八・九とも矛盾が生じない。

## 八〔天保七年カ〕六月廿中

廿二日貴書忝致拝見候。立秋と  
相成候得共、兎角不順之時氣、  
弥御清栄奉賀候。随而野翁無異  
罷在候。御休意被下候。然者  
先頃より疝麻痔等御いたづき、  
曾而不存、御見廻も不申上候。最早  
御快氣之趣承、安心仕候。乍併  
時氣あしく御座候。御養生被成候。  
一、平野奉納御差登被下、忝奉存候。  
早速加入可仕候。

一、会式料・奉納料御差登被下候。  
夫より御叮嚀之義、慥ニ受取申候。  
奉納料ハ、先達而間違ニ而少々過上  
御座候得共、是迄之都合致候得者、  
御算用相済、御預り残も無之候間、  
此段御承知置被下候。為念

申上置候。

一、御詠草拝見仕候ニ付、御返進  
申候。御入手被下候。御序ニ御認登被下候。  
おもしろき御事ニ御座候。

先者右御報如斯仕候。猶期  
後音時候。

六月廿中 千楯

臣規吾兄

御もとに

二白 先年御地ニ而故人ニ御成被成候  
\*大虚庵晃延宗匠之墓所  
定而御地ニ可有之義と存候。

此節社中之人、少々様子御座候而  
被相尋候。もし御近辺ニ而御存之  
御人も御座候ハミ、右墓所  
寺等御示しニ預り度候。乍  
御面倒御頼申上候。若相分り  
候ハミ、一寸一筆御差登被下候。  
賃京払ニ而御申し被下候。

一、当八月中旬十日十一日頃より  
御地へ月見ニ罷出、正徳寺御同苗之  
鹿飛辺遊行、又湖向ひ山田へも  
廻り可申哉と存候。彼鹿飛辺  
御同道申度候。御繰合セも出来候ハミ、  
兼而御心得置、御繰合被下度候。



京地社中ハ、迎も数日かかり候事は同道人も

有間敷候。身輕ニ老人出立申

積りニ御座候。十五夜ハ晴雨之義当テニ

相成不申、十七日当地月次会故、

いづれ十六日より在宿致候事故、十五日ハ

帰京之積りニ而、十一日夜より十四日夜迄

四夜之間も湖辺之晴光を何方にて

成とも見申つもりニ御座候。其内ニ

兩日ハ<sup>其他ニ</sup>滞留と相定申候。御多用之中

左様ニ日数御費しも被成がたく候ハ、

鹿飛辺ハ何とぞ一日か二日御くり合、

正徳寺大徳も<sup>是非</sup>同伴御案内御頼申候

つもりに御座候。以上。

千楯

秋のや君

\*大虚庵晃延……晃演とも。歌人。文政三年没。京都の人。因幡堂大虚庵に住した。『平安人物志』文化十年版（和学）に出る。

■本書簡は六月二十二日付書簡への返書であるから、「廿中」とは二十日ではありえず、一の位の書き落としと考えられる。諸社への奉納を始めた天保六年以降で六月中に立秋を迎えるのは、七年（二十四日）、九年（十八日）、十年（二十八日）、十二年（二十一日）、弘化元年（二十四日）である。本書簡中に、「平野奉納御差登被下」とあり、それは書簡七における出詠の意憑に応じたものと考えられ

るから、同年中のものとするのが妥当であろう。また、八月の近江行きも、書簡九に符合する。

#### 九「天保七年力」八月八日

今日者御状被下、忝致拝見候。

如来意、秋冷之節、弥御清栄

被成御座、奉大悦候。随而野翁

無異罷在候。乍憚御休意被下候。

当家よりも彼は御無音ニ罷過候段、

御高恕被下候。然者十一日比より罷下り候

様御懇意ニ被仰下、忝奉存候。何卒

其比より罷下り候様、兼而存候処、水之<sup>\*</sup>

噂を承り如何とためらひ罷在候処、

御紙面之趣ニ而、先安心仕候。明九日

十日ハ年忌法事、悴方ニ而相勤候ニ付、

十一日ニ者、用向も無之、弥御地へ向ケ、

罷出可申候。乍去、晴雨之義も難斗、

若十一日雨天ならば十二日ニ可仕候。

御存之通十七日月次会日故、十六日ハ

社中追々詠草添削も御座候事故、

何れ十六日ニ者在宿いた<sup>三</sup>ねバ、工面も

よろしからず、仍之、十一日より十五日

迄之間遊行、晴雨之模様ニ可仕候。

何分罷出可申、其節ハ又々御世話様ニ

相預り可申、宜敷御頼申上候。近比

御世話様ニ御座候得共、此段一寸正徳寺君へ

御噂被成置被下候。御頼申上候。山田ハ

如何可仕哉。何れ八幡へも罷出、其節ニ

可致哉とも存候。是も其時のもやうニ

可仕候。御地御連中古今講釈之義

承知仕候。何れ罷出候而相談可申上候。

先者右御報如斯御座候。明日ハ上件

申上候。仏事故今夕手紙相認置

申候。定而明日飛脚へ差出し可申候。

尚拝眉万々可申上候。恐惶謹言

八月八日

城戸千楯

伊藤臣規君

御もとニ

猶々平野奉納之短冊いまだ

御認無之様子ニ被存候。此節

追奉納仕候。御認置被下候。以上。

＊水之噂……天保七年七月の豪雨により引き起こされた琵琶湖の大洪水のことと思われる。「天保七年七月九日大津下坂本の家々、田地に浸水した。(中略)八月になっても水がついたまゝの所が多くあった」(『新大津市史』下巻、一九六二年)。

■大津にも被害を及ぼした琵琶湖の洪水の年から推定した。本書簡の追伸箇所で、「平野」の字が線で消されているのは、平野社への奉

納歌をすでに提出したという書簡八の文面と符合する。また、末行の「追奉納」も、書簡七で予告されていたことがいよいよ実施されたと考えることができる。

#### 十「天保七年」十二月二十二日

貴書被下忝致拝見候。如来意嚴寒

之節ニ御座候処、弥御清栄ニ被成

御座、奉珍重候。随而野翁無異ニ罷在候。

乍憚御休意被下候。然者寒氣御訪

としてむき繁肉貝沢山御恵投

被下、御芳志忝奉存候。不打置賞味

可仕候。拟当年ハ万端諸色高直ニ而、

御同前鬱々敷心ニ相暮し申候。種々

右ニ付御役用も御繁多之趣、御尤も存候。

信楽谷よりかし之実を出し候ニ付、

御玉詠御もらし被下、奉感心之吹聴ニ仕候。

実ニ野翁町内辺ニも日々諸方へかしの実を

拾ひニ参り、相漬候貧家も一軒御座候。

めづらしき御事ニ御座候。何卒年改り

候ハハ、時節も直り可申哉と夫のミを

待くらし候事ニ御座候。月並兼題も

御よミ置も御座候得共、来陽一緒ニ御こし

之趣承知仕候。来酉年月次も出来

仕候ニ付、此度一枚差上候。不相替御出詠

可被下候。何卒正月会始ハ前広之出詠  
御頼上候。先者右御礼御報旁

如斯御座候。如命当年ハ余りも無之、  
来陽目出度可申承候。 恐惶謹言

十二月廿二日 城戸千楯

伊東源兵衛様

二白 乍憚御家内様へも宜敷被仰上被下候。

扱野翁も先達而御相談申上候、御地へ

毎月一宿かけて罷出候事も、時節

段々に寒く相成候上、当年の時節がら

と申、彼是致候由、暮ニも及申候。

何れ医師申進候事故、歩行を存立候

事故、春ハ思ひおこし可申候と存候。

当月三日より例之持病寒氣ニ触候而

差起り、此節迄ふとりをかふり、火燵ニ

身をよせ候のミにて、一寸も他出不申候

故、弥歩行むつかしく相成申候、困入候

御事ニ御座候。

当月兼題  
年欲暮

おこたりの心おそきハおもほえず

くるゝをとしとなげくけふ哉

此頃おもひ

つゞける

とるとしのしるしときけばふりしわが  
かしらの雪もたのむ冬哉

此哥ハ先頃申上候哉覚不申候。

■翌年の干支から推定。天保七年は天候不順のため凶作で、まさに「万端諸色高直」であった。藤井高尚も、同年九月七日付清水宣昭宛で、『松屋文後々集』は先般加筆、城戸迄差遣し置候。(中略)彫刻之義、今少し遅々相成申候。其訳は、近年之米穀高価ニ而、書林共至而窮迫(飯田正一「藤井高尚書簡集四」、『国文学研究(早稲田大学)』一九七六年二月)と伝えている。

#### 十一「天保九年」四月八日

以手紙弥御清栄奉賀候。誠ニ

此間ハ参上、乍毎々御世話ニ相預り

忝奉謝候。其節御頼申置候

コンロ、何卒無御失念御頼

申上候。ねがはくハ何もかもキビシヨ

までも一シヨニ相願申度候。外筒ニハ

野翁哥かき候つもりニ御座候。

新樹のえもかてニほしきものと

奉存候。何分いづれとも御待申上候間、

御こしらへ奉希上候。右之義

もし御失念もやと為念申上候。

乍憚矢西公<sup>\*1</sup>へ宜敷御礼被仰上

被下候。正徳寺へ御出会候ハミ、是又

よろしく被仰上被下候。早々以上

四月八日

閏四月也

尚々野翁来月ハ十七日会後

より八幡へ下向仕候。参りがけ御宅

御無心申上一宿、帰路一宿と相願候

つもりニ御座候。畑中重稔之子息重生を<sup>\*2</sup><sup>\*3</sup>

同道之つもりニ御座候。よろしく奉希上候。

扱先日御宅ニ而御見受申候老女

の哥よミ改メ申候

逢見ずて杉はいくとせふる川の

ふたもとながら神さびにけり

御一笑被下候

\*1矢西公……矢西<sup>なりなか</sup>因中。文政七〜明治四二年。大津の人。大津の富商

菱屋甚兵衛の分家。長尾名鳥、服部春樹等と交わる（吉田虎之助編

『鳩のうみ』私家版、一九二八年、十九丁）。

\*2畑中重稔……『諸社奉納歌集』下鴨社の部に、「因幡鳥取人 畑中

良助 藤原重稔」とある。前掲の「天保七年」三月十六日付の鳥取

藩士鷺見安歎宛城戸千楯書簡（東洋大学稲葉文庫蔵）も、「御地重

稔と申仁上京之義ニ付御尋被下、昨秋之頃より京地へ御留被致、

追々学事も出精被致候事ニ仕候」と伝える。

\*3畑中重生……畑中文仲。鐸舎社中による『奉納熱田社歌』（天保九

年十二月奉納、熱田神宮蔵）に、「畑中文仲 藤原重生」とある

（熊谷武至『近世和歌書誌刪補』へ私家版、一九七六年）八一頁）。

■閏四月から推定。鍛冶職人であった颯々に、焔炉の製作を依頼した

のであろう。

十二〔天保九年カ〕五月二十一日

弥御清栄奉賀候。兎角此節者

鬱々敷天氣困入候御事ニ

御座候。然者玉兔園吾兄より

長包御達ニ申上候。御入手被下候。

一、此間御噂被下候懐中こんろ之

愚詠漸よミ出申候。但シ是ハ

煎茶のミの事ニ相成、牀間

暖房之方ニは間ニ合まじくや

と存候得共、野翁之所持ニはケ様

ニ而すませ可申候。

千楯

月花に

わが

あくがるゝ

ことの葉も

あかぬいろ

香に

にるよし

もがな



右之通ニ御座候。よろしく御頼申上候。

早々如斯御座候。頓首

五月廿一日 千たて

臣規君

まゐらす

■書簡十一において、焜炉の外筒に書くつもりだと述べた歌を、本書簡で書き送ったものと考えられる。

### 十三〔天保九年〕十二月十二日

以手紙奉啓上候。嚴寒之節

弥御清栄奉賀候。然者来年

亥月次兼題出来ニ付、差上申候。

不相替御出詠被下候。尤正月会始之

御詠ハ、何卒当日披露ニ相成候様

御出詠御頼申上候。乍憚矢西君へも

御差上宜敷被仰上被下候。此節ハ

大繁用略書御免、猶期後音時候。

恐惶謹言

十二月十二日 千たて

秋の屋君

御もとニ

年の内に梅の

咲きけれバ

春またぬ老の心を

いそがせて

としのこなたに

かをる梅哉

御笑覧被下候

■翌年の干支から推定。

### 十四〔天保十年〕十二月七日

五日御状相達、忝致拝見候。如

来意嚴寒之節、弥御清栄

被成御座、奉賀候。随而当方無異

御休意被下候。誠ニ先頃ハ御上京

御懇情ニ御訪被下、忝奉大悦候。

御風情も無之所、御念被入候之御文面

奉庫入候。扱見事成はぜ

沢山送被下、別而御地名産、

不打置賞味可仕候。乍憚御家内様へも

呉々宜敷被仰上被下候。

一、来子年月次兼題出来

仕候ニ付、兼而差上置候。何卒

当十七日ニハ納会御出詠被下候。

来正月会始ハ、必々御出詠之義、

奉希上候。乍憚矢西君

\* 山中君へも兼題書御達し

被下候。来陽迄ニ御出会之節ニ而

よろしく御座候。尊君迄さし上置候。

御頼上候。先者右御報御礼

御見廻等相兼如此御座候。猶

期後音時候。 穴賢

十二月七日 千たて

秋の屋翁

御もとニ

尚々追々寒氣相増可申

御自愛專一奉祈候

\* 山中君……山中義信。通称、新兵衛。大津坂本町の両替商・米商。

屋号は塩屋（『大津市志』中巻、一九一一年、一〇二二頁）。なお、

「文政年間大津長者番附」の東前頭十四枚目に「坂本 塩新」とあ

り、富商だったことが知られる（『大津市史』下巻、一九七三年、

四七八頁）。書・狂歌をよくした。安政六年没（『角川日本地名大辞

典』滋賀県、一九七九年、大津市坂本町の項）

■翌年の干支から推定。

十五〔天保十一年〕十二月二十五日

貴翰忝拝見候。如来意

嚴寒之節ニ御座候処、御全家様

弥御清栄被成御座奉賀候。随而野方

無異儀罷在候。乍憚御休意被下候。

然者寒中為御見廻、むきしゞミ

壱籠御恵投被下、毎々御厚志之段

千万忝、不打置賞味可仕候。定而

此節月廻、御繁多之様奉察上候。右

御礼御報旁如斯御座候。乍憚

御内室様何れも様へ宜敷被仰上被下候。

当家内も先同様ニ罷在候。是又宜敷

申上候様申聞候段、御承知被下候。

如命年内余日も無之、折角御取御廻

被成、猶来陽緩々可申承候。

恐惶謹言

十二月廿五日 城戸千たて

伊東源兵衛様

二白 来年丑年中、月次兼題

出来仕候ニ付、乍序差上申候。

外御両人様へ春にても御序ニ

御さし上被下候。何卒<sup>正月</sup>会始之

懷紙ハ不相替御差出し被下候様、御頼申上候。

矢西君山中君へも御出会之節

此段被仰上被下候。

故院の御庭の紅梅を

ある人の一枝つたへおくり

けるを瓶ニさして

千たて

立つかひもあらぬはこやの山かげを  
あこがれいでし玉の枝やこれ

御笑覧被下候。

■翌年の干支から推定。

十六〔天保十二年九〕五月十八日

貴書忝致拝見候。兎角霖雨

晴兼候時節、弥御清栄奉賀候。

随而野翁無異ニ罷在候。乍憚御休意

被下候。扱先達而三月廿一日御上京

御訪被下候御帰路より打続御不快之由、

乍去此節に而ハ御本快之御様子ニ

被察、奉大悦候。追々暑之趣之時節

御自愛專一と奉存候。何分御手おくれ

御繁用奉察入候。御尊之御一件、

如何御座候哉。野翁ニも乍蔭

御案じ申候事ニ御座候。兎角心配ハ

身之毒ニ候得共、相かゝり候事ハ無役物ニハ

御座候。愚妻義も兎角むつかしく

先十人之目にも逆も本復無

覚束様子ニ御座候。医者等も同様

申居られ候。右ニ付先月十八日より

木屋町三条上ル辺へ座敷かり仕、

出養生いたさせ申候。幸ひと実之

両親七十余ニ而、健ニ隠居致居られ候。

右隠居所を取片付、其方へ被参

介抱致被呉候ニ付、野翁ハ先安心ニ

御座候得共、隠宅野翁老人ニ而

漸小女老人飯焚呉候故、何方へも

出がたき上、何事も愚妻のミ込居候を、

諸事用向きかせ不申様いたし、

甚不自由迷惑仕候。御察し被下候。

しかし此節ハ存之外宜しき様子ニ

傍よりも見受申候。実之事ニ候ハミ、重畳之義と

存居候事ニ御座候。当方もケ様之事ニ而

雅事も大ニ疎畧ニ相成居申候。御察し被下候。

御詠草一覽御清書被下御こし被下候。

\*鐸舎類題集御出詠も大低当年中ニ而

よろしく御座候。是又左様思召被下候。

右御報如斯御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

五月十八日認

臣規吾兄

尚々御家内様へ宜敷被仰上被下候。

矢西君へも何れも御社中様方へ

よろしく被仰上被下候。

＊鐸舎類題集……現存するか未詳。天保十二年三月に、千楯を筆頭とする鐸舎社中十五名が、社中の秀歌を集め出版しようと出詠呼びかけの書状刷り物を上梓している（管宗次「京の鐸舎の書状刷り物」、『京大坂の文人続』和泉書院、二〇〇〇年、二六～二九頁）。

■『鐸舎類題集』の記事および千楯の妻の病状から推定。千楯の妻は、天保十四年に死去している（書簡二二二）。

## 十七〔天保十二年力〕六月十四日

十三日御日附ニ而被下貴書、忝致拝見候。如来意大暑之節ニ御座候処、先以御地御全家様御揃弥御清栄被成御座、珍重御儀ニ奉存候。随而野翁家内無異ニ罷在候。乍憚御休意被下候。然者、暑中為御訪、しゞミ忝籠御恵投被下、折節神事ニ相用賞味奉多謝候。

御家内様へも宜敷御礼被仰上被下候。

一、御短冊八葉御差登被下、御地

\*1 西村弥兵衛様御隠居七十賀、

〔大橋\*2〕長広主其外社中詠相認、

進上ニ仕候様被仰下、承知仕候。

尤愚詠懷紙ニ認可申様、致

承知候。此節神事中ニ候へ者、

訪ひ不申、神事過候ハミ、早々よらせ可申候。先御預り申置候。

一、先達而奉納品差上候処、此度

尊君矢西君御助勢し、忝封

二朱被送下、忝猶世話社中へ

相達し可申候。即野翁より入手書

此度差上申候。乍憚矢西君へも

宜敷被仰上被下候。

先者右御礼御請迄、御見廻

旁如此仕候。猶期後音時候。

恐惶謹言

六月十四日

城戸

認置 千たて

伊東源兵衛様

\*1 西村弥兵衛……錢屋弥兵衛。大津上京町の両替商（『大津市志』中巻、一〇一三頁）。名、春道。香川景樹門。鈴雄の先代（『鳩のうみ』、十五丁ウ）。

\*2 長広……大橋長広。歌人・和学者。天明八年～嘉永四年三月五日。京都の人。通称、九右衛門・泰蔵。号、水月庵・柿庭・柿園。本居大平門。『平安人物志』文政五年版（和学）・文政十三年版（和歌および和学）・天保九年版（同上）・嘉永五年版（同上）に出る。鐸舎の中心人物の一人で、後に鐸舎筆頭となる。

■「御改革」とともに「御地七十賀」について触れた書簡十八と一続きと考えられる。なお、天保十二年の大暑は六月五日である。

# 十八〔天保十二年力〕七月十一日

尚々素麵十五把此節沢山到来

合申候ニ付、奉呈上候。御家内様へも

よろしく被仰上被下候。家内よりも

よろしく申上候

申聞候。

九日貴書昨日相達候。忝致

拝見候。如来意残暑嚴敷

御座候処、先以御家内様御揃

御清栄被成御座、珍重御儀ニ

奉存候。随而野翁無異御休意

被下候。然者先頃被仰聞候

御地七十賀、御落掌御達シ被下候由

御叮嚀ニ被仰下、逐一承知候。社中へ

出会之節、仰之趣吹聴可仕候。

扱右ニ付、為御挨拶二朱御差登

御叮嚀之至、早速長広主江

相達候。御伝聞之趣、申遣候処、

此度別紙書状受取書不日申候。

乍憚御先方様へ御差上被下候。

且野翁受取書も差上申候。

御先方様へ宜敷御礼被仰上被下候。

如来命未残暑御自愛被成候。

右御報御礼如此御座候。猶期後音時候。

穴賢

七月十一日

千楯

秋のや翁

御もとニ

猶々時分柄嚙々御繁用

奉察候。追々御改革ニ而

何分当分処諸方如何候哉

今偕々相定り申候間、

種々勝手差惡も御座候趣

承候。御地ニ而も御同様と

奉存候。しかし御業体

などにハ格別御替りも無之哉と

奉存候。御風雅之方も平生ハ

夏向不景氣と御互ひに

奉存候。秋ニも相成候ハミ、少々

京地兼題も不相替御出詠

被下候。

以上

■追伸に「御改革」とあり、いわゆる天保の改革が始まった十二年のことと推定できる。書簡十七から、西村弥兵衛の七十賀の社中詠を依頼されたことがわかるが、本書簡は、社中の賀歌が天津へ届いたことへの、颯々の礼状に対する返書と考えられる。なお、十二年の

立秋は六月二十一日である。

十九〔天保十二年カ〕十二月十六日

貴書忝拝見仕候。如命

嚴寒之節ニ御座候処、弥

御清栄被成御座、奉賀候。随而野方

無異罷在候。乍憚御休意被下候。

然者氷魚一籠、時節

為御訪御恵贈被下、忝奉

謝候。不打置賞味仕候。且又

納会ニ付御詠草御見セ被下、即

一覽仕候ニ付、御返進申上候。最早

明日之義ニ付御認之間ニ合申まじく

存候ニ付、当方ニ而代筆ニ而披露

仕候。此段御承知置被下候。

諸社奉納之義も、今宮ハ此間

相収メ申候。藤森社来正月

伏見梅谷盛り之比、治定奉納仕候。

夫迄ニ御出詠被下候。沓岐国社

是も当年中ニ者御座候得共、

来春二三月頃後藤氏<sup>彼國人</sup>帰国

之節持帰りニ御座候。夫迄ニ而

よろしく御閑暇も御座候ハ、御出詠

被下候。

一、短冊一枚御社中より被御頼候由、

愚詠相認候様、承知仕候。此節ハ

寒氣ニ而大ニ疝氣も困り居申候。

相見合、近々相認さし上可申候。

先者右御礼御報旁如斯

御座候。追々月廻定而御繁用

乍憚御家内様へ宜敷被仰上被下候。

猶期後音時候。恐惶謹言

十二月十六日 城戸千楯

伊東源兵衛様

■本書簡で予定されている藤森社と沓岐国社への奉納は、天保十三年のものであることが確実な書簡二十に、前者が三月に実施され、後者は予定通り歌が集まらなかったと記されていることから、その前年の十二年の書簡であると推定できる。

二十〔天保十三年〕三月二十九日

尚々山中氏へ題書

御序ニ御遣し被下候

昨廿八日御日附之貴書相達候。忝

致拝見候。如来命漸春暖

相催候処、弥御清栄奉賀候。

随而野翁昨年より御案内之通之

持病、漸此節可成ニ本復仕候。



御安心被下候。乍去元来持病之義、色々服藥等も仕候得共、一生病と相見え、兎角歩行腰痛は

例之通ニ御座候。先例之通之義ニ候得者、よろしといたし置申さねバ、外ニ致方も無之事ニ御座候。下拙腰痛歩行のミの義ニ而、全体ハ健に氣分等も食事も相勸ミ候。段々御安心被下候。

一、昨年より御頼之短冊、先達而差上候処、御念入御挨拶被下、千万忝受納仕候。乍憚先方様へ宜敷御礼被仰上被下候。甚以御叮嚀之御取斗、呉々奉祈入候。

一、貴君ニも御疝病之由、格別之義も無御座候趣ニ候得共、随分御自愛被成候。次第ニ老体ニ相成候得者、兎角持病所を得候様子ニ御座候。狂哥御社中追々御増御勢ひ相附候由、重畳之御事ニ奉悦候。

一、壹岐奉納いまだ片付不申、当晦日限ニ諸方催促致申候。御出来も御座候ハ、何卒御差出し被下候。此間雷鳴之日藤森奉納之社中参詣、藤森ハ相済申候。是より右壹岐国を待明ケ申候

積リニ御座候。

一、右壹岐奉納相済候得者、引続て摂津国住吉社奉納仕候。最早此節諸国へ題書相遣し申候。仍而御地へも披露仕候。是ハ彼和哥三神之義、格別ニ大寄仕候積リニ御座候。何卒矢西君へも皆様へも御勸メ被下候。此度題書差上候。何卒御出詠御頼上候。

一、当年ハ御還曆ニ而、去ル廿五日ニ

<sup>\*1</sup>高観音下定光房<sup>坊</sup>ニ而、御賑々敷

御賀出来候由、御噂被下目出度奉存候。定而御摺物等出来可仕と

奉察上候。何分御数寄之通ニ及

御厄年御繁昌ハ一生の徳ニ御座候。乍

蔭御悦申上候事ニ御座候。野翁も御悦旁

罷出候筈之処、上件之仕合、其上兎角

愚妻も今一際をかしからず打臥居、

困り居候ニ付、当春ハ近辺花ニも出

不申、持病旁以おもしろからぬ事ニ

御座候。当春も御不沙汰ニ及可申候。

乍憚御家内様へもよろしく被仰上被下候。

一、<sup>\*2</sup>認<sup>ニ</sup>ふ<sup>ル</sup>り之義被仰下、御安キ事ニ御座候。

任命四部差上申候。代料御念被入

金式朱御差登、即左之通

覚

一 四匁八歩 認ぶり四部

但し壹部ニ付

壹匁二歩づゝ

爾（しかる）ニ金貳朱受取

代八十分

さし引三匁貳歩此度返上

右上銀御返進申候。御落手被下候。

先者右御報如此御座候。少々御閑暇

御上京奉待上候。猶期後音時候。

穴賢

三月廿九日

城戸千たて

秋屋翁

御許御報

- \*1 高観音……近松寺。 大津にある天台宗寺院。三井寺五別所の一つ。  
定光坊はその坊舎（『大津市志』下巻、一六一二～一六一三頁）。
- \*2 認ぶり……城戸千楯の著『詠歌したためぶり』（天保八年刊）。

■ 颯々の還暦記事から、天保十三年と特定できる。本書簡に言う、「昨年より御案内之通之持病」も、前年末と推定される書簡十九の内容と符合する。

二十一 日付無し〔天保十三年十二月〕

追啓

任貴命御有籠御詠草

飛脚へさし出し申候。御入手被下候。

且又来卯年月次兼題

出来ニ付、御地之分さし上申候。

何卒矢西君、塩新様御さし上

被下候。其余も御座候得共、夫々

当方より便宜御座候ニ付、直様

さし出し申候。何卒正月

会始不相替御出詠奉希上候。

懷紙例之如く御座候。

千たて

秋のや君

- \* 塩新……塩屋新兵衛。すなわち山中新兵衛のこと。書簡十四に既出。
- 翌年の干支から推定。

二十二 〔天保十四年力〕 九月二十七日

以手紙奉啓候。追々秋冷之節、  
弥御清栄被成御座、奉珍賀候。  
随而野翁無異罷在候。乍憚御休意

被下候。然者、来ル廿九日先師例祭  
相勤申候。先比御地へ廻文差出し申候。  
定而相廻り候義と奉存候。何卒御見合  
御都合被下、当日御上京奉待入候。尤  
兼題ハ御出詠奉頼上候。

一、野翁義、以御蔭蛸薬師寺内寓居も  
追々繁昌仕、此節ハ実ニ寸暇も

無之、大ニ弱り居申事ニ御座候。ぬてのやハ  
当六月大橋長広方へ名前相譲り候得共、  
是ハ畢竟名前斗りにて、いそがハしさハ  
同様、殊更当年ハ文通其外等も

相増候上、愚妻も無之、少々ニ而も手伝  
呉候者も無御座、相困り罷在候。御察し被下候。

右ニ付、暫時気ぬきに御地へ一ヶ月斗り  
逃行候而心静ニ養生がてら遊び

申候積りを此節存付申候ニ付、内々

御相談申上候。御地御近辺ニ而ひそかなる

小屋敷月がりニかし呉候家などハ

無御座哉。尤野翁了簡ニハ私宅方

余り日々人多く、或ハ留主居屋敷之

主人など六ヶ敷人物尋来り、長談ニも及

など、其中へ又田舎人など来加り候而

終日の相對ニ相困り、持病ニも差構ひ

大ニ勞れ申候故、存付之事ニ候得者、御地ニ而も

余り人よせいたし候義ハ好ミ不申、裏家

ニ而も露路ニ而も六畳一ト間か六畳ト

四畳半ト二タ間斗り之處ニ而只隠れ居候而

氣儘ニ出あるき候積之處、よろしく御座候。

野翁と平生召使候小女を壱人つれ候而、兩人

滞留仕候積りニ御座候。「知る人の家之離れ座敷

などニ而食事万端世話ニ相預り候様なる

所ハ心配多くいやニ御座候。只召使之小女と

二人、食事ハ土鍋を火鉢ニかけ候而

朝夕相しのぎ候と兩人のふとんとあんど一ツさへ

かし物やなどにて御掛料ニ而かり被下候義、御世話にて

よろしく御座候。人の座敷などハ決して

好ミ不申候。御地岩城などより此節度々

催促ニ参り、御地別荘尾花河辺も御座候由

ニ而、それニ何日なりとも滞留いたし候様

など申参候得共、一二夜之義ニ候ハハ兎も角も

候得共、先一ヶ月斗隠れ居申つもり

故、左様之六ツヶ敷ハ大嫌ひニ而御座候。

矢張◎印を出し候而、我儘ニ養生

いたし候事を相願ひ候義ニ御座候。尤

尊君ハ御別懇之義ニ御座候得者、無腹蔵申上、

御世話御頼申上候事ニ御座候。乍併、此義ハ

京地ニ而も人ニ知らセ不申候。逃込候

積りニ御座候間、御地御知る人ニも先

御噂ハ内分ニ而御取斗ひ被下度候。

当廿九日会過候ハハ、来月五日頃

込之内ニ参り申度候ニ付、此義乍内々

御尋申上候。余り寒く相成候てハ出歩行兼申候也おもわしき方無之候ハミ、

又々相考可申候。右御相談申上度

如此御座候。乍筆末御家内様へよろしく

被仰上被下候。猶期後音時候。

恐々謹言

九月廿七日出

城戸千楯

かぢや源兵衛様

貴下

尚々余り御地ニ而も外社中

などへ下拙参り候事ばつと致候而ハ

あしく、自然相知れ候事ハ致方も

無之候得共、御地親類共、松本辺ニ御座候も

其外も御座候。是等へハ先沙汰ハいたし

不申候つもりニ御座候。

当年早春持病之大わづらひより殊更

歩行むつかしく、三五丁之処さへいたし兼、

仍而いづれ駕なしでハ参り兼申候。

御察し被下候。

■大橋長広に鐸舎の名義を譲ったことの報告がなされる。「愚妻も無之」とあるが、千楯の妻が亡くなったのは、天保十四年四月八日であった。法諱、深誉智広恵照禅定尼。享年四十七（西住院過去帳）。したがって、本書簡は、妻の没後から千楯の死去までの間、すなわ

ち天保十四年か翌弘化元年のいずれかであるが、千楯が本書簡中で希望していた「一ヶ月斗り逃行」という計画と、十四年であることが確実な書簡二十三における、「御地ニ而心静ニ十分英気を養ひ申候」という文言とが符合すると考えられることから、両者が一連のものであると推定した。

二十三〔天保十四年〕閏九月二十五日

以手紙奉啓上候。追日秋冷

相増候処、弥御清栄奉賀候。随而野翁

無異罷在候。御休意被下候。

然者先比中ハ御地へ罷越、

段々預御世話、御厚情之段、千万

忝奉存候。即廿三日夕方ニ

無事ニ帰宅仕候。乍憚御安心

被下候。帰宅仕候処、又々留主中之

用向差つどひ居申候。乍去

御地ニ而心静ニ十分英気を

養ひ申候ニ付、用向も荒方ハ

弁じ申候而、埒明申し悦入候。

乍憚御家内様方へ宜敷御礼

被仰上被下候。矢西君へ別段

御礼書状差上申度候得共、此節

例之用向ニ而寸暇無之、いづれ

御礼書状も差上可申候得共、御出会ニ

呉々宜敷御礼被仰上被下候。先者  
右御礼申上度如此御座候。猶期  
後音時候。恐惶謹言

城戸千たて

閏九月廿五日

伊東源兵衛様

二白 此漬物沢山なる品々  
御座候得共、折ふしるす中ニ但馬  
津山より到来仕候。ふつゝか成  
品ニ候得共、手元ニ有合せ申候。  
さし上申候。御笑味被下候。以上

■ 大津にしばらく滞在し、「英気を養」ったことが述べられる。書簡  
二十二の計画がすぐに実行に移され、その期間中颯々に世話になっ  
たことに対する礼状と考えられる。

## 二十四〔年次未詳〕一月七日

尚々試筆愚詠并二月次

兼題書呈上仕候。不相替御出詠  
被下候。以上

改年之御吉慶重畳目出度  
申納候。先以御家内様御揃弥  
御清栄ニ被成御重歳、弥珍重之  
御儀奉存候。随而野翁無異儀、

嘉年仕候。乍憚御休意可被下候。  
右年始御祝詞申述度如茲  
御座候。猶期永日時候。恐惶謹言

正月七日

城戸範次

千楯

伊東源兵衛様

参人々御中

二白 来ル十七日例年之通  
三大人祭祀会始仕候。不相替  
御出詠被下候。

兼題 懷紙認

雪消春水来

右乍序御案内申入候。以上

千楯

伊東君

## 二十五〔年次未詳。天保八または十三年カ〕一月九日

改年之御慶目出度申納候。

先以其御表後家内様御揃

弥御清栄ニ被成、御重歳珍重之

御儀奉存候。随而野方無異嘉寿仕候。

乍憚御休意被下候。右年始御祝詞

申述度、如此御座候。猶期永陽時候

恐惶謹言

城戸範次

正月九日

千楯

伊東源兵衛様

追啓 野翁義、旧蠟(マツ)より例之持病疴

ニ而引籠罷在、爾今平臥仕候。乍去

此節追々本復之方へ向申候。御安意被下候。

一、来ル十六七日両日、例年之通

三大人祭祀哥会始仕候。何卒

不相替御出詠被下候。乍憚此段

矢西君へも被仰上被下候。

兼題 鶯入新年語 懷紙

右之通ニ御座候。当日何卒御上京

奉待入候。

一、坂本町山中真兵衛様方へ、別紙

乍御面倒御達し被下候。岩城一統ハ

京地より別ニ案内仕候。山中氏へ

会之義相知らせ申候。夫迄ニ達シ候者

よろしく御座候。御頼申上候。

右之義十一日御案内旁如此御座候。

千たて

秋のや君

■持病を訴えた天保七年十二月と推定される書簡十か、あるいは十二

年十二月と推定される書簡十九と一連のものである可能性が考えら  
れる。

二十六〔年次未詳。天保九年以前力〕一月十四日

尚々菊廻屋方へ御伝聞之趣奉承候

早々相達し可申上候。乍憚り御家内様へも

宜敷被仰上被下候。

年始貴翰忝致拝見候。御同前

目出度申納候。先以御家内様御揃

弥御勇健ニ被成御座、珍重之御儀ニ

奉存候。随而野方皆々無異罷在候。

乍憚御休意被下候。右御答紙如茲

御座候。猶期永陽時。恐惶謹言

正月十四日

城戸範次

千楯

伊東源兵衛様

追啓 目出度申納候。為御菓子料

壺封送被下、忝幾久受納仕候。

将又図中子(矢西)よりも御叮嚀ニ壺封

送被下、忝受納仕候。猶其内罷出、

御挨拶可申上候得共、乍憚貴君より

宜敷被仰上置被下候。当春より月次も

御出詠被下候段、賑々敷悦入候御事ニ御座候。



会初ニは昨年も御上京之義、何卒

御光来奉待入候。即御詠草

御兩人分一覽仕候間、早々御認置

被下候。尤端作ハ京地之分ハ

春日侍三大人影前

詠霞遠山衣歌

右之通ニ御座候得共、遠方普通ハ。

詠霞遠山衣歌

右之通ニ御座候。京地ハ影前へ出席

御座候故之義ニ御座候。他方ハ何れニ而も

宜敷色々ニ相認上申候。左様思召

被下候。

此間正徳寺君御上京御面会申

御噂申度候。当月か来月より少々

春氣催候ハミ、兼而昨年御噂申上候出歩行

存立申候。其節ハ御世話ニ相預り希候。

図中子へも御噂被成置被下候。

春詠試筆御笑覽被下候。

千楯

秋廼屋吾兄

■「当春より月次も御出詠」とあり、矢西図中が鐸舎の歌会に参加するようになった時期のものと思われる。本稿の書簡のうち、図中の名の初出は書簡十一（天保九年四月八日）であるから、それ以前か。

## 二十七〔年次未詳〕一月十四日

貴翰忝拝見仕候。年始御祝義

御同慶奉存候。如命余寒之節、

御清栄奉賀候。抑当方会始

兼題御詠草御差登拝見仕候。

最初之御詠申受度奉存候。何卒

当日間ニ合候様、御差登御取斗被下候。

且又、為御菓子料老封御惠贈

被下、幾久受納仕候。奉厚謝候。

右御報御礼込如斯御座候。尚

期後音時候。恐惶謹言

正月十四日 千楯

臣規君

二白 塩藤様御届状忝奉存候。

正徳寺大徳御上京之由、未御高来

無之候。

\*塩藤……山中新兵衛すなわち塩屋新兵衛（塩新）の同族と思われるが未詳。

## 二十八〔年次未詳〕一月二十四日

当月十四日御日附之貴書忝致

拝見候。余寒之節弥御清栄被成

御座、奉賀候。然者御懷紙早速会始

御差登被下、殊ニ矢西君又々

御登被下、御兩人様共当日間ニ合

相手向披露仕候。如命当座差上候

画賛ニ御座候。即二枚差上候。

矢西君と御兩所御取分御出詠被下候。

外ニ賛いたし御座候。例之通御互ニ

福引ニ仕候。御兩人分御当り之画之

御座候。是又矢西君へもいづれとも

御差上被下候。扱右御賛被下候画も

最早外へ福引ニ相当御座候ニ付、

御短冊ニも一葉づゝ画賛哥御認こし

被下候。是ハ当社へ相残し候事ニ

御座候。無御捨置御頼申上候。先者

右御礼旁如此御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

正月廿四日

ちたて

おみのり君

尚々乍憚矢西君へもよろしく

御礼被仰上被下候。兼当之写ハ

近々差上入御覧可申候。

二十九〔年次未詳〕一月二十五日

尚々御家内様へも宜敷御伝声

被下候。其内相見合、野子も罷出  
可申奉存候。

当月十七日御芳状相達シ、忝

致拝見候。未余寒之節、弥御地

御家内様御勇健被成御座、珍重

奉存候。然者、会始兼題之

御懷紙送被下、不相替忝

奉存候。尤御念被入数枚御認、

何れも奉感心候得共、右之中

彼是評談仕、白雪之ふる郷

人もうちいでゝ、と申を披露

仕候。余も折角御差登、御返進

申上候も残念と申受置候。何卒

不殘御恵ミ被下候。御上京も可

有之思召之处、雨天ニ而無其義、

殘心ニ奉存候。何卒近々御上京奉

待入候。例年之御摺物御恵被下、

是又不相替忝奉存候。めづら

しき御趣向取て奉感吟候。

真恵美主方御伝声之義承候。

尚又可申通候。右御答御礼

旁如斯御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

正月廿五日

千楯

伊東源兵衛様

二白 野子兼題詠左ニ申上候。

春生人意中 千楯

まづにはふ心の花に鶯の  
初音おそしとおもふ春哉

当座  
朝梅

終夜ねやにも嗅て朝廷の

うめやいくらの薫りなるらむ

御笑覧被下候

### 三十〔年次未詳。天保八年以降〕二月十三日

此度六部の外ニ老部御預り置被下候。

罷下り候節、外方へ遣し申度候。乍御面倒

御頼申上候。都合七部ニ相成申候。

弥御勇健奉賀候。一昨日ニハ御状被下、

忝矢西御氏、正徳寺御届物御世話、

是又忝奉存候。被仰越候振<sup>（マツ）</sup>ぶり

六部差上申候。又々御入用ニ

候ハ、暇時にてもさし上可申候。

今朝右持参ニ而、御地へ可罷出

こしらへ致候処、雨ふりかけ候ニ付、

相やめ申候ニ付、飛脚へ出し申候。

何れ不遠罷出、拝顔と相たのしみ

居申候。当十七日兼題並ニ

北野奉納当廿五日納申候。何卒

御出詠被下候。何れ不遠其内罷出

可申候。もし正徳寺様御出会も御座候ハ、

左様被仰上被下候。尤当月ハ十七日

会之外廿一日ニ本式会相催候ニ付、

迎も罷出候而も御地ニ一宿之外ハ

出来申間敷、淀村正田君、瀬田

等ハそれ過ニ而参り候つもりニ御座候。

早々以上

二月十三日

千楯

秋のや君

■『詠歌したためぶり』の刊年である天保八年以降の書簡である。

### 三十一〔年次未詳〕三月十八日

昨日之御手紙今日忝拝見仕候。追日

春暖弥御清栄奉賀候。当方無異

御休意被下候。然者御報被下候趣

逐一承り申候。再答相畧申候。御免被下候。

一、当月会御詠出忝一覽仕候。御序ニ

御認登被下候。即御詠草御返進仕候者、

乍失礼存寄を傍書仕候。

一、為御菓子料老封御恵投被下、忝

受納仕候。即別紙入手書差上申候。

一、奉納哥之義、御出詠被下候段、御厚志

忝奉存候。即題書別紙ニ差上申候。

御入手被下候。

右御報如斯御座候。猶期後音時候。

恐惶謹言

三月十八日夜認置 千楯

伊東臣規君

尚々当月愚詠

朝落花

千楯

春の夜の夢のあらしハまさしくて

あさ庭しろくかれる花哉

<sup>当座</sup>  
薄暮雉子

いづかたにいなさゝ原やどりせん

くれぬと告てきゝすたつ也

狩くれしかた野の冬のあはれさへ

霞にこむる雉子の夕ごろゑ

右御笑覧被下候

### 三十二〔年次未詳。天保四年力〕三月十八日

暮春

あやなしや何のいとまもながき日を 花

をしむまに春ハくれけり 千楯

忝拝見仕候御詠草、十七会

衆議判ニ而相定申候。点多きを

御認被下候。

冷泉為村卿御自作之人丸神像を

不斗去方より譲り賜り候ニ付、

即当日会当座へ寄花懷旧トカ題

詠出皆々供し申候。何卒御出詠

可被下候。正徳寺大徳へも此段

御序ニ御噂被下候。御大病人御座候由、

嚙々御心配奉察上候。乍憚宜敷

被仰上被下候。此度ハ御取込中と存

罷有、御詠草尊君迄差上申候。

御ついでによりしく被仰上候。

穴賢

三月十八日 千楯

秋のや君

■「御大病人」が、天保四年四月十九日付書簡ニで死去が記された正徳寺良昭の子であれば、本書簡は天保四年のものと考えることができる。

### 三十三〔年次未詳〕四月二十四日

一筆啓上仕候。追日薄暑之節

弥御清栄奉賀候。然者野翁義、廿日

無事ニ帰着仕候。御安意被下候。誠ニ

此間者、八幡往返御座敷止宿仕、御懇

情之段忝殊ニ大勢之義、色々御馳

走ニ預り、忝奉存候。家内悴よりもよろしく御礼申上候様、申聞候。扱此<sup>桶カ</sup>耐ずし<sup>桶カ</sup>壺□

昨日八幡より社中ニ御座候。沢山被登申候

ニ付、御地ニ而ハ不珍敷品とハ存候得共、

乍狭少御分配奉呈候。御酒之肴ニ

被召上被下候ハ、忝可奉存候。先者、

右御礼旁如此御座候。御内君御娘君等

宜敷被仰上被下候。猶期後音時候。

四月廿四日

千楯

伊東源兵衛様

尚々八幡へ御差下し被下候

大封物、無滞帰着仕候

御安心被下候

### 三十四〔年次未詳〕 九月十四日

此間ハ参上久々ニ而得貴意相乗候、忝奉存候。

昨日ニ而万葉取かへ、筆等さし上候。

御紙面被下、折ふし大取込中

御報不仕、失礼御免被下候。

正徳寺君より被惠候耐ずし、

尊家様ニ而御用ひ被下様申上

置候処、御さし登被下、甚恐入候。

いか様先様御志之義、受申候者

実意忝仰随ひ申候。折ふし

飛脚参り候節ハ、真恵美其外

二三輩、月見を宅ニ而いたし居候。

不取敢肴ニいたしもてなし申候。

飛脚初夜時分ニ参り甚いそがし

申し上、右来客中御返事

不仕候義ニ御座候。筆ハ御噂申上候通

之筆ニ而、即取合申置候。一本づゝ

本の間ニ入置候。定而御入手と奉存候。

是ハ進上ニ可仕候。左様思召被下候。

先御つかひ試も被成候。乍延引

右御報如此御座候。早々以上

九月十四日 千たて

秋のや君

尚々御家内様へよろしく

被仰上被下候。殊ニ御来客中

御邪魔仕候。恐入候。且矢西氏へも

御いとまも不申上、是又よろしく

御断被仰上被下候。

夜分よミ候

十三夜のうた

白ぎくの花のもなかの

月影ハ

ミたぬ光りもミちてにほへり

まがくし心つくしの

琴のをの

数にあふ夜の月のさやけさ  
秋も今ハうつりくゝて

しらつゆの

霜とも見ゆるけふの月哉

入御笑覧候

三十五〔年次未詳〕九月二十五日

一筆啓上仕候。追日秋冷相増候処、  
弥御清栄被成御座奉賀候。野翁  
無異ニ罷在候。乍憚御休意被下候。  
然者愚庵義、当廿三日帰宅仕候。  
帰路御立寄可申上御噂致候処、先方  
社中ニ追々被留、長滞留ニ相成候上、  
会前ニ而心急ぎ候ニ付、右仕合ニ御座候。  
正徳寺様へハ返りがけ立寄、尊君へも  
御伝聞御頼申置候。定而相達ニ可申奉存候。  
誠ニ参りがけニ者、両夜之御無心例之  
御懇意ニ而、無遠慮ニ御世話かけ、忝  
殊ニ同道人も御座候而、旁御面倒奉恐候。  
是又宜敷御礼申上候様、可申聞候。  
御家内様へ宜敷厚く御礼被仰上被下候。  
又々来春二月頃、彼地へ罷越候約束  
仕置候。其節ニハ又々事により一宿之義

御ねだりも難斗、宜敷御頼申上候。

一、永源寺紅葉、誠ニ絶景ニ御座候。

八幡より同道人四人上下とも八人ニ而参り

彼寺ニ而一宿仕、ゆるく一覽仕候。

伊崎寺と申所へも、船にて案内被致候。

是も絶景也。長浜祭り、長命寺へハ

参り申候いとま無之、重而と申候而

やめニ仕候。福堂村之報然大徳も

伊崎へ舟にて参り候節、舟より

見受ながらえ参り不申、折角

御聞糺被下、残念之仕合ニ奉存候。

又々重ねて参り可申候。

一、来ル廿九日十三夜之御詠、何卒

御頼申上候。直様御清書ニ而もよろしく

御座候。往返之間取も御座候ハ、

当方ニ而代筆いたさせ可申候。

一、傘二本御預ケ申置候。差急ぎかへり候而

思ひ出し申候。右ハ賃京払と被成、

飛脚へ乍御面倒御さし出し被下候。

御頼申上候。

先者右御礼旁如斯御座候。半月斗

留主中とかく用向差支乱筆

御高免被下候。乍憚御家内様へよろしく

被仰上被下候。尚期後音時候。

恐惶謹言



九月廿五日

城戸千楯

伊東源兵衛様

二白 此品鹿抹ながら例之

到来合せもの奉呈候。御笑納被下候。

三十六〔年次未詳〕九月二十六日

御状忝拝見仕候。追日寒冷ニ御座候処、

弥御清栄奉賀候。随而当方無異、

罷在候。御休意被下候。然者此間ハ

山科御訪御宿番之由、御苦勞奉存候。

御詠草拝見、御返進申上候。御清書

何卒廿九日迄ニ御頼申上候。扱

野翁義も大御無沙仕候。来月

さし入ニは何とぞ参上仕度奉存候。

此節ハ殊之外雅俗用さしいで候者

せはしく暮し申候。何れ来月者

参上と相心掛罷在候。乍筆末

御家内様へもよろしく御伝被下候。

御報迄如此御座候。恐惶謹言

九月廿六日 千たて

秋の屋君

以手紙申上候。追日寒氣相増候処、

弥御清栄奉賀候。随而野翁無異

罷在候。御安意被下候。然者此

雲丹此頃沓岐国人人門在之、

彼地より沢山登し到来致候、

越前之うにとハ製ちがひにて

如何御座候半と存候得共、余り

沢山貰ひ候ニ付、少々御分ケ呈上

仕候。御酒之薬にハよろしからん

と存候。御笑味被下候。此節追々

寒氣ニ而御地へも当年ハ罷出候義

出来かね申候。乍憚御家内様へ

宜敷被仰上被下候。寔ニ先月

例祭ニハ重篤君共御豎詠草

御差送り、賑々敷会相勤申候。

此節甚雅事繁用ニ而いまだ

写シ不仕、不遠相写し入御覧可申候。

矢西君へも御不沙汰仕候段、宜敷

被仰上被下候。さしたる事も無御座候

得共、御訪旁如此御座候。猶

期後音時候。恐々謹言。

千たて

十月十七日

秋屋翁

御許ニ

三十七〔年次未詳。天保十〇十二年頃カ〕十月十七日

尚々今日ハ月次会ニ御座候。

兼当御笑覧被下候。

山館冬来 千たて

門さしてなしとやいはん神無月

ふゆをいざなふ軒の山風

<sup>当座</sup>  
夜埋火

夜もすがらかきおこされてやする哉

ものこそいはねあはれ埋火

夜を寒ミおもひおこせる埋火に

まくらをよせて春の夢見ん

右入御笑覧候

\*重篤君……矢西重篤カ。通称、三左衛門。大津の人。富樫広蔭門。

天保二年生。富樫広蔭編『言幸舎門中千百人一首』（安政四年刊）に入集。

■「壱岐国人」が、書簡十九の「後藤氏」を指すのであれば、本書簡は天保十二年以前ということになる。また、「重篤君」が矢西重篤であれば、さほど年次は遡りえない。とすると天保十〜十二年頃かと推定される。

### 三十八【年次未詳】十月十八日

忝拝見仕候。如来意追日

寒冷相増候。弥御清榮奉存候。野翁

風邪追日快気仕候。御安心被下候。

貴翁も御同前之御様子、兎角

此節ハ一統之流行と存候者、

御自愛被成候。正徳寺様へ

御返し御世話忝候。

奉納入手仕候。鳥目百三十文

是又慥ニ受取申候。月次御詠草

即夜前会席ニ而披露仕候。

御序ニ御清書御こし被下候。

野翁も大低貴翁同様ニ

詠御座候。少々おもふきハ違申候。

春秋の花はいそ野の冬

がれにうつゝともなくの

こるなでしこ 御笑覧被下候。

右御報如此御座候。早々以上。

十月十八日 紙魚

秋のや君

### 三十九【包紙】〔年次未詳〕二月十八日

【包紙表】

大津舟頭町

かぢや源兵衛様 城戸範次

無事急用

質済

【包紙裏】

二月十八日

(朱印) (「志美廻／牟呂也」) 従京都

【紙背】

千楯

月前梅

(食卓十点)

影見れば梅か月かと  
はるの夜のおほろのしミづ  
くみぞかねける

月影にいろいろばゝれて  
うめのはなあやなく袖を  
かをらする哉

おのが香を月にゆづりて  
いろ見せぬ梅はこゝろも  
あやなかりけり

\*翻刻に際し、高梨素子氏、勝又基氏のご教示を得た箇所がある。記  
して感謝申し上げます。

\*また、貴重な資料の閲覧をお許し下さった諸機関、真顔門人につい  
てご教示下さった牧野悟資氏、金戒光明寺西住院の過去帳について  
ご教示下さった戸川隆博氏に、心より感謝申し上げます。